

自転車が過ぎる街そのものが墓

まちりこ 埼玉県

過ぎ去ったものが如何に大切に離しがたいものであっても、目の前から無くなってしまったらもう手の中にはないのだ。変化しながら死に向かい続けるのが人間で、私たちが触れるものもそれに抗えない。街は、死に向かうための大きな器である。

ちゃん付けで呼ばれてからは北枕

松下 誠一 東京都

「ちゃん付け」は、関係性によって愚弄するときにも甘さを持たせるのにも使用できる。けれど、どちらも精神の対等さは損なわれる。その関係性の変化は主体にとっては死と同等のものようだ。「北枕」での体言止め、音の冷たさに静かだけれど燃えるような拒絶の感情が見える。

君子蘭君の煙草の香がいいの

小林紅石 埼玉県

煙草が好きなのでも、銘柄が好みなのでもない。「君」が吸ってから纏っている香りがいいのだ。けれど、いいと感じているのはあくまで「君の煙草の香」というささやかな抵抗がある。君子蘭の鮮やかな色や姿が、留めておくことができず溢れてしまう想いの強さそのものよう。

恥じらいもかわいいでしょう

撫でて 雪

吉沢 美香 宮城県

自身への愛をめいっぱい表現する。ともすると滑稽にも映るかもしれないけれど、それを手離しでできる眩しさには勝てない。けれど、雪は撫でたら溶けてなくなってしまう。望むものを受け取ると失ってしまう自己があるのだ。それもひっそるめて、朗らかに愛を受けたがる。

句読点なんてなかった

ふたりの心臓

こはくいろ

大阪府

句読点が存在することで、読みやすく内容も分かりやすくなるが、整理されるというのは、手離される何かがあるということ。けれど「ふたりの心臓」には、そもそもそれがなかった。溶け合い、互いの境目もなくなる。分かりやすく整理をする選択肢なんて、はじめから存在しないのだ。

トランペットのかたちに

春の息を注ぐ

日下部

友奏

東京都

管楽器を演奏するとき、息の出し方や勢いは楽器ごとに違い、演奏者は自身の持つ楽器の形をイメージしながら息を吹き込む。それは無自覚のうちのことなのだろうが、その感覚によって美しい音は鳴らされるのだ。トランペットの艶やかな管体に「春の息」が満ち、一回り大きくなるような豊かな気配を感じさせる。

君が笑う声が好き

そこに立っててよ

観光名所になってみせてよ

うろ仔

北海道

観光名所は場所であるから人がなることはありえないけれど、それを求める。誰もが「君の笑う声」に惹かれ足を止めると信じている主体の想いが可愛らしい。無茶なお願いをする口ぶりとは裏腹な眩いほどの素直さ。

首を少し絞めれば石鹸の香り

西尾日月

島根県

精神的にも肉体的にも苦しみを感じる際、命の密度は爆発的に上がる。首を絞めたとき上昇する体温に併せて石鹸の香りが浮かび上がる様は、非常に官能的で美しい。体温と汗と混ざり合い、濃く香り立つ。

銃口のような瞳で見つめられ

恋はひとつの死だと悟った

高松

瞳

東京都

気づいてしまったら、もう戻れない。そんなものがこの世には溢れている。恋心はそのもの

自体がもう激しい。なのに、その心を抱いている人の特性にまで激しさが含まれていたら。もう逃げられない。想いの強さは、どんなものも対象を刺すのだ。

## コーラ瓶

透かした先に焼死体

秋山颯汰朗 群馬県

よくわからないけれど、怖くて忘れられない作品。焼死体が目の前にあるのにコーラを飲んでいるのも、瓶に透かして眺めている意図もわからない。どのような感情も当てはまらない姿。けれど、歪んだガラス瓶の視界、焼死体の色、コーラの水滴や甘ったるさ、そういうものの取り合わせに主体の機嫌がいいように見えてしまい、そこも理解できず怖くなる。